

## 隣組と回覧板

野瀬 隆平

救急車の鳴らす「ピーポー」の音が、どんどん近づいてくる。そして、近所まで来てピタリと止まった。今度はどこの家だろう。

ご多分に漏れず、この住宅街も高齢者が増えてきた。連れ合いを亡くし、一人で頑張っている人もいるし、子供の家に移り住んでゆく人も多い。それに反して引っ越して来る人たちもいるが、数は少ない。

新しく来る比較的若い人たちは、近所づきあいをあまり積極的にしようとはしない。従って我々が運営している自治会にも入りたがらない。

ただ、若い世帯でも家庭から「ゴミ」が出ることは避けられないので、ゴミの当番だけはするが、自治会には会費を払ってまで入らないという。

ご存知だろうが、『隣組』という歌がある。

「とんとん とんからりと 隣組 格子を開ければ 顔なじみ」

で始まる歌である。歌詞の中に出てくるキーワードは、わが自治会でも行っている「廻して頂戴 回覧板」である。伝達事項やニュースなどを紙に書いた形で回覧する。

便利になった世の中、一斉メールを各家庭に送ればすむ話で、若い人たちは、「いまだに昭和かよ」と思うだろう。特にコロナ禍の下では、人と人の接触を避けるという意味からも、この方が望ましいように思われる。

しかし、近ごろ気づいたことがある。回覧板には単に書いてある内容を伝達するだけでなく、その他にも重要な役割を担っていることだ。

回覧板をお隣さんに直接手渡すか、不在ならポストに入れる。手渡す時には一言二言挨拶を交わし、お互いの健康状態を確かめ合うことができる。また、回覧板がその家でストップしていれば、何か異変があったのではと気づく。

『隣組』の歌詞は、正しく次のように終わっている。

「知らせられたり 知らせたり」

隣組の制度は、戦時中に住民同士の監視を意図して作られたとも云われているが、今日ではお隣さん同士が無事に暮らしていることをお互いに確認し合う大切な役割を持っており、その象徴が「回覧板」なのかも知れない。